

はじめに

東北大学は、1907年(明治40年)の建学以来、一世紀以上の歴史を有する総合大学として、「研究第一」、「門戸開放」、「実学尊重」の理念を掲げて優れた人材を輩出し、数多くの研究成果を世に送り出してきました。

現在、私達は東日本大震災での被災経験をはじめ、産業収益力の低下や少子高齢化、グローバリゼーションに伴う国際競争の激化、地球規模の環境問題など、多くの課題に直面しています。このようなグローバルでかつ混沌とした状況の中、大学の知に、東北大学に何が求められているでしょうか。私は「ワールドクラスへの飛躍」と「復興・新生の先導」をキーワードと考え、総長就任時の目標として掲げました。



『ワールドクラスへの飛躍』

『ワールドクラスへの飛躍』とは、学術基盤を豊かにし、教育研究レベルの一層の向上を図ることにより、グローバル社会を牽引する卓越した教育・研究を行う、世界から尊敬される大学になることを意味します。今年、懸案であった教育・研究面での改革を昨年に続き実行する年となります。

教育面では、昨年4月に発足した高度教養教育・学生支援機構を充実させ、GPA制度や科目ナンバリング制度等の整備を行う必要があります。また、グローバルリーダー育成プログラムを推進し、日本の若者を世界に送り出すとともに、海外から多くの若者を受け入れる体制を整備していきます。

研究面では、国際高等研究教育院で行ってきた若手研究者支援を拡充していきたいと思えます。また、知のフォーラム事業のもとで滞在型の交流を実現し、学生や若手の研究者と世界の著名な研究者との交流を推進します。さらには、昨年7月に設置した高等研究機構を実質化して、WPI-AIMR型の研究組織を幾つか整備していく予定です。

『復興・新生の先導』

震災直後の混乱の中で設置された東北大学災害復興新生研究機構のもとで実施されている8大プロジェクトは、災害科学国際研究所や東北メディカル・メガバンク機構、耐災害ICT研究センター、複合生態フィールド教育研究センター(女川)など拠点となる建物が完成し、研究成果も徐々に形を成してきました。3月に仙台で開催された国連防災世界会議では、災害科学国際研究所をはじめとして多くの本学関係者が研究成果を報告しております。これらに加えて、福島第一原発の廃炉に向けた研究やそのための人材育成、さらには震災直後に提案された100を超えるアクションプランが、様々な部局で実施されています。今年はこの研究成果を、見える形で世の中に提示していく年にしなければなりません。

これからの東北大学 ～『東北大学グローバルビジョン』

この2つの目標を達成する具体的な道筋を明らかにするために、昨年5月に『東北大学グローバルビジョン』を公表しました。これは、全学的観点から策定し、一昨年公表した「里見ビジョン」、そして、それに連動する「部局ビジョン」の二部構成になっています。本学を構成する高度で多様に富む諸組織の力を結集し、大学全体として将来へ向けた取り組むべき課題を社会に提示することで、大学改革の主體的実行及び大学の機能強化を一層推進していきます。

今年12月に開通する地下鉄東西線では、通学や通勤に利用される3駅が整備され、本学のキャンパスは仙台駅から15分以内で結ばれることとなります。その傍らで、青葉山新キャンパスも順調に整備されております。

東北大学は、時代を先取りして未来を創造し、歴史に自らを位置付けることができる存在であると信じます。東北大学が果たすべき使命、取り組むべき活動を皆様にご理解いただきながら平和で公正な人類社会の発展に貢献していく所存です。

2015年7月
東北大学総長 里見進